

盛岡市内の私立幼稚園・保育園における発達支援の充実をめざした 訪問支援モデル事業の成果と課題

佐々木 全*, 加藤 義男**

石川 高揮, 小山 聖佳, 上川 達也, 櫻庭 裕晃, 木村 洋, 田淵 健, 中軽米 璃輝***

(2019年2月15日受理)

Zen SASAKI, Yoshio KATOU

Kouki ISHIKAWA, Seika OYAMA, Tatuya KAMIKAWA, Hiroaki SAKURABA,

Hiroshi KIMURA, Ken TABUCHI, Riki NAKAKARUMAI

Results and Issues in the Visit Support Model Project Aimed at Enhancing Developmental Support
at Private Kindergartens and Nursery Schools in Morioka City

要 約:

幼稚園や保育園における発達障害等によって特別な支援を必要としている幼児への対応が急務である。盛岡市においてはそれに資する専門家の訪問支援の体制を整備してきたが、現状では、私立幼稚園と私立保育園（認定こども園を含む。以下同様。）が利用できる公的事業は少ない。

そこで、盛岡市自立支援協議会の子ども発達支援分科会「幼・保チーム」では独自に編成した訪問支援チームによるモデル事業を開始した。本研究では、この事業における成果と課題を明らかにすることを目的とする。

そのために、この事業において訪問支援を実施した私立幼稚園と私立保育園の職員52名を対象に、アンケート調査を実施し、その分析結果から訪問支援の成果と課題を明らかにした。これによると、訪問支援チームによるモデル事業は支持されていた。今後、盛岡市当局と共に、私立幼稚園と私立保育園を対象とした訪問支援事業の実施体制の実質的な整備を進めていきたい。

Key words: 幼稚園, 保育園, 自立支援協議会, 訪問支援

I はじめに

平成24年4月から法制化された自立支援協議会は、「関係機関、関係団体及び障害者等の福祉、医療、教育または雇用に関連する職務に従事するものその他の関係者が相互の連絡を図ることにより、地域における障害者等への支援体制に関する

課題について情報を共有し、関係機関等の連携の緊密化を図るとともに、地域の実情に応じた体制の整備について協議を行い、障害者等への支援体制の整備を図ること」を目的とした¹⁾。

盛岡市は、当初、盛岡市とその周辺市町を対象とした盛岡広域圏障害者自立支援協議会に参画しており、盛岡市として自立支援協議会を設置運営

*岩手大学大学院教育学研究科, **盛岡市自立支援協議会, ***岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻

していなかった。しかし、平成27年に盛岡市における独自の地域課題への対応を重視し、盛岡市自立支援協議会が設置された。この中で、平成29年には盛岡市における発達支援体制の整備充実を目指し「子ども発達支援分科会」がその下部組織として設置された。そこでの協議や調査から、盛岡市の発達支援に関わる課題として以下の内容が挙げられている²⁾。

- ①保護者や保育者が子どもの発達面について気になった時、気軽に相談できる窓口が欲しい、ワンストップで総合的に受けとめて必要に応じてつなぐことが出来る総合相談窓口が欲しいという要望が強い。
- ②児童に係る相談支援では福祉的対応スキルのみならず子どもの発達に関する理解とアセスメントの力が求められるが、現状ではそれらに対応できるスタッフが不足している。その結果として、児童の個別支援計画におけるセルフプランの割合が高く、相談支援員による計画相談の充実が求められている。
- ③乳幼児の場合、発達面で気になるが障がい診断・認定までにいたらないグレーゾーンの子や保護者による障がい理解を得ることが難しい場合が多くみられる。障がい認定を受けて公的な支援を受けている子よりも、グレーゾーンにいて支援の手が届かない子の方が多く、グレーゾーンの子どもを含めての発達支援の充実が求められている。
- ④2018年2月実施のアンケート調査（子ども発達支援分科会実施）によると、市内の幼稚園・保育園において「支援の必要な子」が5.3%在園している。このなかで、診断、認定を受けている子は37%で、残りの63%は診断、認定をうけておらず、公的な支援制度の対象外となるグレーゾーンの子である。保育園・幼稚園への訪問支援を通して、支援の必要な子、発達面で気になる子すべてに対する支援の充実をはかることが求められている。

これらの内容のうち④について、盛岡市自立支援協議会の子ども発達支援分科会に「幼・保チー

ム」を設けそこで検討することとなった。前出の2018年2月実施のアンケート調査は、盛岡市内の私立幼稚園と私立保育園（幼稚園53園、保育園25園、合計78園。認定こども園を含む。以下同様。）を対象として実施されたが、その中で専門家による訪問支援を所望しながらもそれが実現できていないと回答した園が11園（幼稚園が5園、保育園が6園）あった³⁾。

そもそも私立幼稚園と私立保育園は、公的事業である「盛岡市公立保育園発達支援巡回相談事業」の対象ではなく、専門家による訪問支援を所望した際には、自助努力でその方策を開拓しなければならなかった。例えば、私的なかわりに依頼した、専門家（例えば、療育従事経験者）と個別の契約し訪問支援を得ている事例や、偶発的に知り得た、特別支援学校のセンター的機能の活用によって訪問支援を得ている事例があるという。しかし、このような取り組みを開発、維持するために暗中模索や日常的な苦慮を余儀なくされている園があるという実態は、盛岡市において改善すべき喫緊の課題である。

そこで、盛岡市自立支援協議会の子ども発達支援分科会「幼・保チーム」において、独自に編成した訪問支援チームによるモデル事業を開始した。本研究では、この実践報告をするとともに、この事業における成果と課題を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ モデル事業の概要

1 実践協力園とその概要

モデル事業の対象（以下、実践協力園と記す）は、前出のアンケート調査の結果から「専門家による訪問支援を所望しながらも、それが実現できていない11園（幼稚園が5園、保育園が6園）」のうち、「支援の必要な幼児が複数名おり、かつ、事業協力に対して内諾が得られた4園」を選定し、モデル事業の趣旨や実践協力内容に関する説明を行った上で承諾を得た。

具体的には、以下の4園（幼稚園2、保育園1、

認定こども園1)である。併せてこれら実践協力園を担当する訪問支援チームを編成した。構成員は盛岡市自立支援協議会のメンバーと有志の事業協力者であり、各チームは2名で編成した。これは、保育・幼児教育の観点から実践的な内容のコンサルテーションを行う役割と、発達支援の観点から理論的な内容のコンサルテーションを行う役割を想定したことによる。

なお、本稿においては、各実践協力園の概況や実施内容の詳細についてはプライバシー保護の観点から明示を避けた。

- ①私立A幼稚園：在園児約77名であり、このうち支援を要すると判断されたのは11名(14.3%)であった。職員数は園長1名を含め8名であった。巡回相談チームは、心理職(発達障害等を専門とする者)、教育職(幼児教育・保育を専門とする者)にある2名とした。なお、実際に訪問支援時に相談対象となった園児は3～5歳児クラスにおける10名であった。
- ②私立B幼稚園：在園児約130名であり、このうち支援を要すると判断されたのは13名(10.0%)であった。職員数は園長1名を含め14名であった。巡回相談チームは、教育職(特別支援学校のセンター的機能従事者)、研究職(特別支援教育を専門とする者)にある2名に、教職大学院の大学院生(特別支援教育を専攻する者2名)を加えた4名とした。なお、実際に訪問支援時に相談対象となったのは、4名であった。これは、訪問支援対象クラスを1クラスに限定したことによる。
- ③私立C認定こども園：在園児約112名であり、このうち支援を要すると判断されたのは11名(9.8%)であった。職員数は園長1名を含め13名であった。巡回相談チームは、療育職(母子通園事業等への従事経験者と福祉事業所指導員)にある2名とした。なお、実際に訪問支援時に相談対象となった園児は未満児及び3～5歳児クラスにおける17名であった。
- ④私立D保育園：在園児約90名であり、このうち支援を要すると判断されたのは9名(10.0%)

であった。職員数は園長1名を含め17名であった。巡回相談チームは、療育職(母子通園事業等への従事経験者)にある2名とした。なお、実際に訪問支援時に相談対象となった園児は未満児及び3～5歳児クラスにおける9名であった。

2 訪問支援の実施要領

訪問支援は、隔月1回全4回(8月～3月)程度実施することとし、訪問支援のない月には、訪問支援チームが一堂に会して事業実施状況に関する報告及び検討をすることとした。

訪問支援時には、午前中の保育参観、午後には幼稚園教諭または保育士とのカンファレンスを実施することとした。

対象幼児に関する事前情報並びに相談事項についての訪問支援チームへの伝達は、初回こそ各園の任意の様式及び内容にて実施されたが、2回目以降は、訪問支援チームが例示した様式「育ちの記録」が活用されることになった。

以上の内容を原則としつつ、実施日程や内容の詳細(カンファレンスの持ち方や内容、「育ちの記録」の活用方法など)は、訪問支援チームと各園によって調整し、確定することとした。

Ⅲ モデル事業の評価

モデル事業についての評価は、実践協力園の職員に対する質問紙による満足度調査を行い、この分析をもって行った。具体的には以下の通りである。

1 対象

調査の対象は、実践協力園の職員52名である。この内訳は、私立A幼稚園(職員数は園長1名を含め8名)、私立B幼稚園(職員数は園長1名を含め14名)、私立C幼稚園(職員数は園長1名を含め13名)、私立D保育園(職員数は園長1名を含め17名)である。

調査の依頼は、平成30年7月～8月に実践協力の依頼と併せて行い予め承諾を得ていた。この依頼については、自立支援協議会長と各実践協力園

の園長との間で進められた。なお、この中では回答者個人や園が特定されないこと等の倫理的配慮事項の説明を十分に行った。その後、11月に調査の趣旨や内容について説明し調査用紙を持参または郵送した。回答は12月末日までに郵送にて回収した。

2 内容

調査項目の内容は、盛岡市自立支援協議会子ども発達支援分科会「幼・保チーム」の訪問支援チームにて検討し設定した19項目と自由記述である。ただし、19項目中の1項目については、誤植によって質問内容自体が成立していなかったため除外した。

調査項目については、次のような5件法で回答を求めた。分析の際はそれぞれを点数化した。すなわち「1：全くあてはまらない（1点）」「2：あてはまらない（2点）」「3：どちらともいえない（3点）」「4：あてはまる（4点）」「5：よくあてはまる（5点）」である。

調査項目のうち「Q1：訪問支援を利用してよかった」を目的変数、「Q2：訪問支援スタッフは子どもの発達や障害について、必要十分な専門知識を有していた」など15項目を説明変数として、CS（Customer Satisfaction）分析を行った。これには統計分析研究所株式会社アイスタットが提供する専用ソフトを用いた⁴⁾。この手順では、まず各項目について得点の平均値を算出する。次に、説明変数である他の項目について、目的変数との相関係数を算出する。

前者を「満足度」と称して縦軸、後者を「重要度」と称して横軸として散布図を描画する。その上で、説明変数である項目15項目における満足度と重要度の平均値をもって散布図を4象限に分割する。これによって「満足度と重要度が共に高い項目」「満足度が低い重要度が高い項目」「満足度が高い重要度が低い項目」「満足度と重要度が共に低い項目」として視空間的に分類し解釈することができる。

併せて、説明変数である項目17項目について「改

善度指数」を算出する。これは、平均値座標から各項目の座標位置までの距離である。これは改善の優先順位をより明確にすることができる。すなわち、視空間的に分類し解釈することを補助するものといえる。

なお、「Q18：訪問支援事業は、日常的に利用できることが必要である」「Q19：訪問支援事業は、簡便な手続きで利用できることが重要である」については、単に意識を尋ねたものであるため、CS分析には加えず別途分析するために満足度のみ算出した。

自由記述については、得られた記述内容について、共通する意味内容を見出し、調査項目の分析結果に対照させ考察する。

3 結果と考察

調査の回収数は51（回収率は98.1%）であった。このうち、回答に不備があったものを除いた有効回答数は50（有効回答率は98.0%）であった。

質問項目及びそれぞれの満足度、重要度、改善度指数を表1に示した。併せて、散布図を図1に示した。ここでは、満足度の平均値は4.44、重要度の平均値は0.41に合わせて縦軸と横軸が描かれた。表1によれば、各項目の満足度をみると、目的変数「Q1：訪問支援を利用してよかった」では4.74であり、説明変数である他の項目では最大値4.84、最小値4.02であり、総じて肯定的な評価が得られた。

(1) 「満足度と重要度が共に高い項目」

「満足度と重要度が共に高い項目」に該当した項目は「Q2：訪問支援スタッフは子どもの発達や障害について、必要十分な専門知識を有していた」「Q3：訪問支援スタッフの話は分かりやすかった」「Q4：訪問支援スタッフの態度は親しみやすかった」「Q5：訪問スタッフの助言内容は、園の状況に即していた」「Q7：訪問支援によって、対象児の理解が深まった」の5項目であった。前の4項目は訪問支援スタッフに関するものであり、後の1項目は訪問支援の効果に関するものであった。

表1 調査項目及び各項目の満足度、重要度、改善度指数

	質問内容	満足度	重要度	改善度指数
Q1	訪問支援を利用してよかった	4.74	—	—
Q2	訪問支援スタッフは子どもの発達や障害について、必要十分な専門知識を有していた	4.84	0.61	-0.32
Q3	訪問支援スタッフの話は分かりやすかった	4.81	0.57	-1.43
Q4	訪問支援スタッフの態度は親しみやすかった	4.73	0.71	5.34
Q5	訪問スタッフの助言内容は、園の状況に即していた	4.60	0.46	-2.31
Q6	訪問支援によって、対象児の保育について意欲が湧いた	4.62	0.43	-4.01
Q7	訪問支援によって、対象児の理解が深まった	4.64	0.52	-0.75
Q8	訪問支援によって、対象児の支援方法が得られた	4.52	0.28	-9.30
Q9	訪問支援によって、対象児の理解や支援方法について同僚との共通理解が得られた	4.46	0.34	-5.20
Q10	訪問支援によって、対象児の保護者対応について意欲が湧いた	4.02	0.33	1.92
Q12	訪問支援の頻度は必要十分だった	4.10	0.36	1.53
Q13	訪問支援の参観の時間は必要十分だった	4.23	0.29	-2.98
Q14	訪問支援のカンファレンスの時間は必要十分だった	4.18	0.41	2.54
Q15	訪問支援によって、対象児の担当職員の力量の向上がなされた	4.26	0.45	3.03
Q16	訪問支援によって、対象児の担当職員以外の力量の向上がなされた	4.04	0.43	5.70
Q17	訪問支援によって、対象児の園としての組織的な機能の向上がなされた	4.06	0.41	4.48
Q18	訪問支援事業は日常的に利用できることが必要である	4.62	—	—
Q19	訪問支援事業は簡便な手続きで利用できることが必要である	4.60	—	—

・ Q11は除外したため欠番。
 ・ Q1 は目的変数、Q2～Q17は説明変数。
 ・ Q18とQ19はCS分析の対象外の項目。

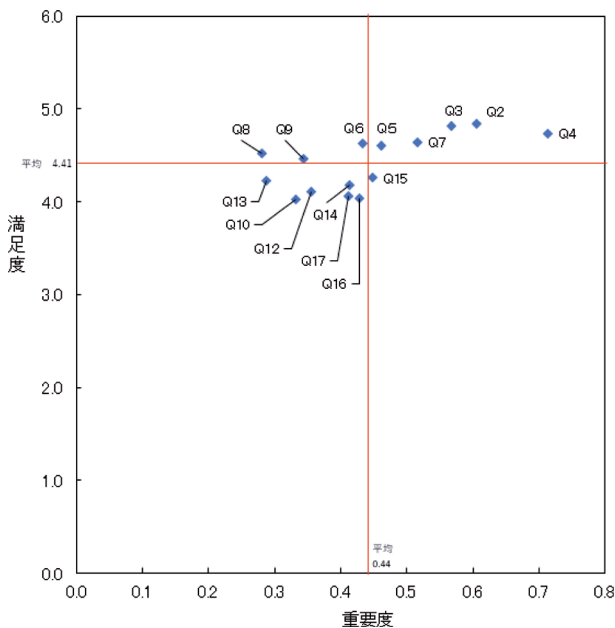


図1 散布図

これらは、目的変数「Q1：訪問支援を利用してよかった」の評価への貢献があり、実際に満足が得られていたという意味で、本事業の成果であると言えた。

(2) 「満足度が低いが重要度が高い項目」

「満足度が低いが重要度が高い項目」に該当した項目は、「Q15：訪問支援によって、対象児の担当職員の力量の向上がなされた」であった。

これは、目的変数「Q1：訪問支援を利用してよかった」の評価への貢献が想定されながらも、実際には満足が得られていない。裏を返せば、この項目の満足度の向上が「Q1：訪問支援を利用してよかった」の満足度の向上につながると言え、その意味で本事業の課題であると言えた。

(3) 「満足度が高いが重要度が低い項目」

「満足度が高いが重要度が低い項目」に該当し

た項目は、「Q6：訪問支援によって、対象児の保育について意欲が湧いた」「Q8：訪問支援によって、対象児の支援方法が得られた」「Q9：訪問支援によって、対象児の理解や支援方法について同僚との共通理解が得られた」の3項目であった。

これらは、目的変数「Q1：訪問支援を利用してよかった」の満足度の向上への貢献は少ないものの、実際に満足が得られていたという意味で、本事業の成果である。ただし、満足度向上よりも現状維持でよいと判断された。

(4) 「満足度と重要度が共に低い項目」

「満足度と重要度が共に低い項目」に該当した項目は、「Q10：訪問支援によって、対象児の保護者対応について意欲が湧いた」「Q12：訪問支援の頻度は必要十分だった」「Q13：訪問支援の参観の時間は必要十分だった」「Q14：訪問支援のカンファレンスの時間は必要十分だった」「Q16：訪問支援によって、対象児の担当職員以外の力量の向上がなされた」「Q17：訪問支援によって、対象児の園としての組織的な機能の向上がなされた」であった。

これらは、目的変数「Q1：訪問支援を利用してよかった」の満足度の向上への貢献は少ないため、満足度向上を目指す必要性も少ないと判断される。ただし、いくつかの項目が平均軸周辺に密集していることから、視空間的に分類し解釈することのみに頼るのではなく、改善度指数に注目しその改善の優先順位を検討した。その結果「Q16：訪問支援によって、対象児の担当職員以外の力量の向上がなされた」が7.28で最高値だった。その他では「Q17：訪問支援によって、対象児の園としての組織的な機能の向上がなされた」は5.98、「Q14：訪問支援のカンファレンスの時間は必要十分だった」は3.86であり、これら3項目については、本事業の課題として解釈する。

(5) 自由記述等

自由記述によって得られた回答は28件あり、これを表2に示した。ここでは「1. 日頃一生懸命取り組んでいるつもりですが、実際の姿を見て頂きカンファレンスの時間を取っていただくことで

教職員がその子を共有でき、皆で一緒に頑張っていこうという気持ちになります」など肯定的な評価が記された。また、この記述の中には、訪問支援スタッフが「対象児の実際の姿を見てカンファレンスをする事」についての評価や「皆で一緒に頑張っていこうという気持ちになる」という、職員にとっての情緒的な面へのサポート機能の実感が記されていた。また「3. 気になる子どもへの理解関わり方支援の仕方が分かりとても参考になりました」では、対象児の理解やかかわり方など、職員にとっての知識・技能面へのサポート機能の実感が記されていた。これらは、概ねCS分析によって指摘された成果とも一致するものであった。

また、CS分析において課題として指摘された各項目に関する記述もそれぞれあった。「Q14：訪問支援のカンファレンスの時間は必要十分だった」については、「2. 担当の先生方に実際の子供の姿を見て頂き、カンファレンスでお互い伝わりやすいような気がした。(後略)」などがあつた。

「Q15：訪問支援によって、対象児の担当職員の力量の向上がなされた」「Q16：訪問支援によって、対象児の担当職員以外の力量の向上がなされた」「Q17：訪問支援によって、対象児の園としての組織的な機能の向上がなされた」に関する記述として、「28. 専門性の高い経験豊富な先生方のご指導をいただいて対象児の保育や援助に職員が迷いなく対応できたことがとても良かったです。(中略) 今後も職員の資質向上と子供の保育や援助をベストな形で進めていく場合訪問支援事業は大切必要不可欠と思います」「11. 訪問支援によって対象児の理解や支援方法が分かりとても良かった。職員間で共通理解が得られる点も良いと思う」などがあつた。

これらから、カンファレンスの意義や職員の力量向上や組織的な機能の向上の意義を前提とし、その充実を求めていることが、CS分析における課題の指摘の背景にあると解釈した。

また、表1によれば「Q18：訪問支援事業は、日常的に利用できることが必要である」「Q19：

表2 自由記述の回答

-
1. 大変お世話になっております。日頃一生懸命取り組んでいるつもりですが実際の姿を見て頂きカンファレンスの時間を取っていただくことで教職員がその子を共有でき、皆で一緒に頑張っていこうという気持ちになります。
 2. 担当の先生方に実際の子供の姿を見て頂き、カンファレンスでお互い伝わりやすいような気がした。またその子にとって必要な支援が具体的に分かり、すぐに実践できてよかった。
 3. 気になる子どもへの理解や関わり方、支援の仕方が分かりとても参考になりました。
 4. 見て欲しい子がたくさんいるので定期的に来園していただけたら嬉しいし職員全員でカンファレンスを受けられたら良いなあと思いました。
 5. 私立幼稚園に発達支援専門の先生が巡回に来て指導して下さるの难道うかと望んでいたところです。今回支援事業の対象の園となり実際の対象児を見ていただき助言をいただくことができてよかったです。ありがとうございます。
 6. 様々な視点からのお話を聞くことができてよかったです。ありがとうございます。
 7. 今後も是非継続できればと思います。
 8. 専門的なことを聞くことでより早い対応の仕方を知ることができることは必要なことと思う。
 9. 対象の子供が実際はどのような状況にあるかはっきり分からなかったが、このような機会があり先生方から見た子供がどのような問題があるのか聞きどのように対応していったら良いのか話を聞くことがとても良かった。
 10. 対象児への対応に日々悩んでいたことが園全体としての取り組みとして取り上げてもらったという感じがして心強く思った。支援事業を通して共通理解が深まってよかったと思う。
 11. 訪問支援によって対象児の理解や支援方法が分かりとても良かった。職員間で共通理解が得られる点も良いと思う。
 12. 直接見ていただいてアドバイスいただけるのは支援児を保育する上でとても参考になり助けになると思う。
 13. 対象児の支援方法など具体的に教えてもらえたのでとても助かりました。
 14. 専門の先生方複数でのご意見やご助言を頂けたのが良かったと思います。
 15. 今回とても意義ある事業だと感じており次回は是非参加させていただきたいと思います。
 16. 支援対象児についてどのように支援したらよいか不安があったので訪問支援をしていただき勉強になった。
 17. 訪問支援に来ていただき支援が必要な子の対応として参考になることがたくさんありました。ありがとうございます。
 18. 支援が必要な子が増えているので自分の保育を振り返る機会になりました。
 19. アドバイスを頂いて関わり方の不安など軽減されることもあるのでありがたいと思います。
 20. トイレや食事の事など具体的に教えていただき援助の参考になった。教わったことを保育で実践しどのように変化したかを再度見ていただき、さらにアドバイスしていただけたらより効果があるのではないかと感じた。
 21. 当園の教員たちが積極的に質問意見を述べられるようになるとカンファレンスの時間がもっと充実したものになると思いました。担当の皆様には寄り添ってくださりありがたかったです。
 22. 頻度は3ヶ月に一回でも良いので定期的に見に来ていただけると助かります。
 23. 定期的に来園して下さることで支援が必要な子に助言を頂けるので助かっています。
 24. 細かいアドバイスをして頂いて日々の保育に助かりました。今後もよろしく願いいたします。
 25. わかりやすいアドバイスありがとうございます。今後もアドバイスを活かして保育をしていきたいと思っています。
 26. 訪問支援員の先生が子供たちに親しみをもって声をかけてくださるのでいつも通りの姿を見ていただくことができ良かった。
 27. 専門の支援員に子供を見ていただくことで色々な支援の仕方を教えていただけるのは本当に助かっています。どの先生もどんな小さな質問でも優しく答えてくれるので安心して質問してしまっています。色々な見方目指す方向があることなど日々勉強になりますありがとうございます。
 28. 専門性の高い経験豊富な先生方のご指導をいただいて対象児の保育や援助に職員が迷いなく対応できたことがとても良かったです。私たちの園を今回選んでくださりとても光栄ですし今後も職員の資質向上と子供の保育や援助をベストな形で進めていく場合訪問支援事業は大切で、必要不可欠だと思います。
-

訪問支援事業は、簡便な手続きで利用できることが重要である」における満足度はそれぞれ4.62と4.60であり、訪問支援事業が簡便かつ日常的に利用しやすいものであることに対して賛同が得られた。前者に関する記述として「22. 頻度は3ヶ月に一回でも良いので定期的に見に来ていただけると助かります」などがあった。後者に関する記述として「5. 私立幼稚園に発達支援専門の先生が巡回に来て指導して下さるのだろうか」と望んでいたところ。今回支援事業の対象の園となり実際の対象児を見ていただき助言をいただくことができてよかったです。ありがとうございます」などがあった。これは、そもそも訪問支援の制度利用のすべがなく、手続きの取りようもなかったために、本事業によってこの機会と機能が提供されたことを指摘するものであった。

V まとめと今後の課題

本事業は、実践協力園からの肯定的な評価を得た。その内容の第一は、訪問支援スタッフの対応である。そもそも訪問支援事業の成果は、これに従事する訪問支援スタッフの資質に規定されるということであり、必然的な結論と言えよう。その意味で訪問支援スタッフの資質の育成は恒常的な課題ともいえる。

第二は、訪問支援による効果として、対象児の担当職員の意欲を喚起するという情緒的な面へのサポートと、対象児の理解の深化という知識・技能的な面へのサポートとなり得たことである。

一方、本事業における課題は、本事業自体の充実への希求が動機としてあり、その具体的な内容としてカンファレンスの充実や職員の力量の向上、園としての組織的な機能の向上が挙げられた。これらは訪問支援事業によって即時的に実現される内容とは考えにくく、むしろ訪問支援事業の継続による結果として、中長期的な時間軸の中で求めていかなくてはならないだろう。ただし、園としての組織的な機能の向上については、そもそも訪問支援事業が、対象児の発達や適応の促進等に

主眼が置かれがちであるために、俎上に載せにくい内容であろう。したがって、これには意図的なアプローチの開発が求められよう。

さて、盛岡市自立支援協議会では、地域課題に即応し、その解決のためにモデル事業を立ち上げ、その事業実務を通じて運営要領と実践上の成果を求めた。これはいわゆるアクションリサーチ⁵⁾である。このことは、「障害者等への支援体制の整備を図ること」という自立支援協議会の目的に合致するものである。今後、盛岡市当局と共に「障害者等への支援体制の整備を図ること」の具現化として、私立幼稚園と私立保育園を対象とした訪問支援事業の実施体制の実質的な整備を進めていきたい。

付 記

本研究は、本事業の第一報として年度末に関係者への報告し、次年度計画を検討するための資料とすべく、便宜上12月までの内容によってまとめたものである。

謝 辞

本研究及びモデル事業にかかわり、ご理解とご協力をいただきました関係の皆様には、記して感謝申し上げます。

文献等

- 1) 厚生労働省(2012): 自立支援協議会の設置運営について. https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/kaiseihou/dl/tuuthi_h240330_25.pdf (2018. 12. 31. 閲覧).
- 2) 盛岡市自立支援協議会 子ども発達支援分科会(2018): 2018. 6. 27. 発達支援チーム会議資料 (未刊行).
- 3) 盛岡市自立支援協議会 子ども発達支援分科会(2018): 市立保育園市立幼稚園における巡回指導の実態に関するアンケート結果, 2018. 6. 27. 発達支援チーム会議資料. (未刊行).
- 4) 菅民郎(2013): Excel で学ぶ多変量解析入門.

オーム社.

- 5) 矢守克也(2007):アクションリサーチ, 質的心理学の方法 語りをきく, 新曜社, 178-189.